戦争時の残虐行為「医の倫理」から反省を

検証を進める会が発足

『戦争と医の倫理』の検証を進める会」の設立大会と記念講演が九月二七日、東京大学の会議室で行われ、医師・医学者など八五人が集まりました。民医連の医師も多数参加しました。（村田洋一記者）

安田講堂前で。1942年の第11回日本医学会総会が、軍服姿の石井四郎を囲んで記念撮影した場所

発起人の西山勝夫さん（滋賀医科大学名誉教授）が「進める会」発足の経過を説明しました。日本医学会総会はかつて一五年戦争に協力しました。良心的な医師たちは第二七回日本医学会総会（〇七年）でその経緯を「医の倫理」の立場から検証するよう要請し、「進める会」設立の準備をはじめました。

日本の医学会・医師会は、医学者・医師が戦争中に七三一部隊や戦地などで行った「人体実験」「生体解剖」「生体手術練習」「九大捕虜解剖事件」などの非人道的行為について検証していません。当時の資料の多くが焼却されたり、散逸し、残された資料も「未公開」「隠蔽」され、その全貌は明らかではありません。

七三一部隊については、当時のGHQが石井四郎ら関係者を尋問しましたが、研究成果と引き替えに戦争犯罪を不問にしました。

戦時中の行為を真摯（しんし）に反省しなければ再び過ちを犯します。「進める会」の目的は「医学・医療の発展と医の倫理の向上、ひいては日本が戦争を起こすことのない平和な社会になることに寄与する」ことです。

記念講演は神奈川大学教授の常石敬一さん。「一五年戦争と『医学犯罪』」をテーマに話しました。

石井機関と七三一部隊を研究してきた常石さんは、「細菌感染実験と生体解剖を行なったのは事実。七三一部隊など存在しないという人もいるが資料が存在している」と強調しました。

「『医学のため』という錦の御旗のもとで、残虐な行為に疑問も、罪の意識もなかったのではないか。医学会は過去を明らかにし、再び過ちを犯さず、犯させない立場を明確にすべき」と語りました。

活動報告では、京都民医連中央病院長の吉中丈志さんが「京大医学部医学概論講義の考察」と題して、京大生に「戦争と医学」について講義した時の学生の感想などを報告しました。